

1. はじめに

筆者は、臨床心理学を専門としています。25年前に手話を学び始めたのをきっかけに、これまで多くのろう者と知り合い、臨床心理士として、きこえない人々の抱えるさまざまな心理的困難に向き合ってきました。本稿では、心理士としてきこえない人々を支援してきた立場から、手話とろう者とのかかわりについて論じます。きこえない人々の経験から学び考えたことを振り返り、ろう者や難聴者の心理体験における手話の重要性を綴っていききたいと思います。

3. 手話否定と親子関係

重度の聴覚障害もつA子は、幼稚部から高等部までろう学校に通いました。軽度の知的障害を併せもっていたためだと推察されましたが、幼稚部の3年間は口話訓練についていけず、毎日叱られて、泣いて過ごしました。小学部でも口話法による教育がつづき、授業の内容はまったく分かりませんでした。当時のA子は、母親のそばにおとなしく寄り添う子どもだったそうです。

中学部に進学すると、先生が手話を使ってくれました。その瞬間、「学校の色がパッと変わった」とA子は言います。無彩色からカラーになったのです。実は、A子にはデフファミリー出身の級友がいました。幼稚部から同じクラスですごしてきた二人は、先生や親の目に触れない場所では、手話でやりとりしていたそうです。つまり、A子は「目で理解できることば」があることを知っていたのです。それゆえ、中学部の先生が手話を使った時、突如、その手から「意味」が飛び込んできて、世界の色を変えたのでしょうか。同様の体験をして、「ずっと紗のかかっていた世界が、突然、くっきりと輪郭をもつようになった」と表現した青年もいました。「ことば」は本来、それくらいの威力をもつものなのです。

けれど、残念なことに、A子の家族は手話の存在に気づきませんでした。幼稚部で受けた指導は、「教師が手話なんて使うはずがない」という強い思い込みを母親にもたらしたからです。その頃から、A子は時折り家の中で暴れるようになりました。それでも、学校に在籍している間は、なんとか収まっていた。ところが、社会に出ると、状況は一変します。工場の環境に適応できなくなったA子は、上司や同僚との関係がうまくいかないと、母親の胸ぐらをつかんで、「お母さんが悪い」と泣き叫んだそうです。

カウンセリングに臨んだ A 子は、「口話の勉強が厳しかった」「手話を覚えてくれなかった」と母親を責めました。A 子の訴えを根気よくきいていく中で、幼稚部時代から A 子が手話を知っていたことがわかったのです。教科学習はほとんど理解できなかった A 子ですが、地図を見ながら交通機関を使って、どこへでも一人で出かけていきます。畑仕事や台所仕事についても、少し教えられれば器用にこなせる面がありました。就職先の工場の作業も、それ自体は合格点をもらっていました。A 子の能力のギャップについて、両親が不思議に思った時期もあったようです。しかし、教育の中では、口話（日本語）のできなさを「生来的な知的障害に依るもの」と結びつけて判断したのです。そのため、A 子はかなり重い知的障害をもつ存在と認識されて育ちました。

手話での面接を重ねる中で、A 子はどんどん成長していきました。過去の出来事を振り返って、その時の気持ちを思い出し、伝えなかったことを確認しながら、今の自分と繋げてみるようになりました。自身の受けてきた扱いに対して、涙を流して憤慨したこともあります。「娘が本当にそんなことを言ったのですか？」「あの娘にそんなことを考える力があったのですか？」と問い返す両親の目に、後悔を物語る涙が溢れました。その涙が、A 子の心に踏ん切りをもたらしたのだと思います。両親に「心からわかってもらえた」と感じた時、A 子と家族の関係が変わり始めました。

口話中心の環境では、ろう者に対して、聴者は圧倒的に優位です。ましてや、きこえる親ときこえない子であれば、強制と服従の関係はたやすく生じます。混乱と怒りのなかで、一方的に親を責める青年の姿は、彼らが健聴者から一方的に責められ、誤解を受けてきたことの裏返しです。「庇護する」「依存する」という関係は、「強制された」「服従しなければならなかった」という訴えにつながっていくのです。

きこえる親は、きこえない子どもにとっての健聴者^{イメージ}の元型になります。その点を意識した丁寧な情報提供と、親が自らの「子ども観」「発達観」「障害観」を問い直すきっかけとなるかわりを、早期支援の大切な柱にしなければならないと考えています。

4. ろう児の孤独

手話も情報保障もない教室で、きこえない人々は空想に時間を費やしながらか成長してきました。空想は芸術活動にも結びつく創造性として、しばしば奨励されます。しかし、心理的な困難に至ったきこえない人々の空想は、安易に肯定できるものではありません。わからない苦しさの中で、それ以上みじめな思いをしなくて済むよう、空想の中で友だちを作ったり、いじわるなクラスメートをやっつけていたりもしました。そうやって授業中を過ごし、給食の時間は、周りの談笑が視界に入らないように、下を向いて黙々と食べて席

を立ちました。自分は「認められていない」「皆より劣っている」と感じる不安から逃れる方略として、頭の中で自分を英雄に置き換えていた人もいました。

そんな空想が、ときに現実と非現実の境界を越えてしまうことがあります。ここに「妄想」の問題が入りこんでくるのです。妄想症状を主訴に紹介されてくる聴覚障害者や家族の話の聞くと、中学や高校時代から空想を現実とすりかえてしまう瞬間があったこと、家族は彼らの奇妙な行動やつぶやきに気づいていたことがわかってきます。もしもその頃に精神科医や心理士に出会って適切なケアを受けていれば、一過性の症状で治まっていたかもしれないと思うケースもありました。

彼らの空想がなぜ妄想まで発展したのか。問題の背景には、想像を超える孤独がありました。日本語の習得に秀でて聴覚障害者であっても、それは同じです。子どもの頃からいつも本ばかり読んでいた自分を振り返って、「私の場合は、空想する代わりに読書によって心を守っていたのですね」と言った聴覚障害学生がいました。

家庭における孤独はより深刻です。健聴家族に誕生したきこえない子どもの多くは、食卓や団欒の場でとても寂しい体験を重ねてきました。彼らがそれを語ってくれたときの苦悩と号泣を、筆者は忘れることができません。一対一で向かい合って話せば、家族一人ひとりの言うことはある程度読み取れますが、家族同士が会話を始めた瞬間、ついていけない世界に取り残されます。いつしか彼らは、「私も加わりたい」「ぼくも理解したい」という要求を絶つことで、屈辱や苦痛から心を守るようになります。

学業面で成功を修めたか否か、一定の社会的適応を保って生活しているか否かによらず、手話から遠ざけられて育った聴覚障害者の多くが、家庭において、また学校において、二重の孤独を味わっていました。きこえない少数派として聴者中心の世の中を生き抜いていかなければならないからこそ、家庭においては、会話や説明が「全部わかる自分」を体験してほしいと思います。

筆者は、言語学の見解に学ぶなかで、手話習得が日本語学習にマイナスの影響を及ぼすことはないと思っていますが、もし仮に、マイナスの影響をもたらすことが証明されたとしても、幼少期の手話の存在が親子にもたらす自然な喜びと、それに基づく健康な心理発達を断念することはできません。「母語のない子どもに育ててはいけない」と警告されることの意味を、心理臨床の立場で痛感してきました。

家族同士が交わす日常の何気ない会話のなかには、沢山の学びが含まれています。日々の小さな発見の報告、大人が眉をひそめて語る内容、きょうだいを叱っている親のことば、

テレビからの情報に対するさまざまなコメント、そこには生活していくための知恵や知識が詰まっています。「目で生きる」ことを分かち合うとき、きこえの違いという壁を越えて、「誰もひとりぼっちにはならない」家族の団欒が存在するのです。

7. カウンセリングと手話

きこえない人たちとの面接に手話を導入すると、しばしば、発達の質的変化がみられます。口話で何度説明されても理解できない場合でも、手話によって映像思考をうまく展開していく援助をすると、「**P**と**Q**との関係は、**R**と**S**との関係と同じ」とか、「**X**が**Y**であることは、**Z**もまた**Y**であるかもしれない」といった論理的思考が可能となるろう者がいます。また、自分の体験の一つひとつが「感情という意味」をもっていることにも気づきます。**A**子の事例の中の、「娘にそんなことを考える力があったのですか？」と驚いた両親のことばは、発達の質的変化が生じたことを明らかにしています。

では、なぜ手話がそうした変化を可能にするのか。それは、手話がコミュニケーションの重要な要素である「同時性」「相互性」「対等性」「効率性」を保障してくれるからです。そして、これらはカウンセリングだけでなく、養育や教育においても保障されなければならない要素です。

8. ろう児の愛着形成と手話

私たちの初期記憶はおおよそ3歳後半から4歳台に求められますが、3歳までの子どもを観察すれば、彼らの精神生活の豊かさに驚かされます。つまり、私たちがしばしば「ものごころつく」と呼ぶ以前の、想起できない時代にも、幼児はさまざまな感情を味わいながら、世の中の事象や人々を結びつけて考えているのです。深層心理学的に言えば、想起できない時代だからこそ、後の人生に重大な影響を与えるのだと言えるでしょう。この時期に親子が手話に出会えるかどうかは、早期支援の決め手となります。

乳幼児の発達を関係性の展開という視点から捉えると、0歳から3歳台には、子どもに伝わりやすい自然なコミュニケーション手段を用いて、母親を代表とする世話者と子どもが、楽しんで豊かにやりとりすることが大切です。ろう児が3歳までを整った手話環境で育つということは、愛着形成にとって重要な人生最初の数年間を、最大限に伝え合える「ことば」を介したかかわりのなかで過ごすということです。世話者とのやりとりをとおして、子どもは人と「かかわり合う能力」を発達させていきます。きょうだいのいる家族であれば、彼らも遊びに加わるでしょう。通じ合っていることを最もよく実感できる媒体を得ることで、子どもの反応性が高まり、世話者側も面白くなっていきます。

新生児聴覚スクリーニング検査で子どもの聴覚障害が発見された後、早期支援の過程で両親が手話の大切さを知り、手話を学びながら子育てをしてきた親子がいます。F男の両親もそうでした。

1歳半のF男は少し以前から、空になったおやつ皿を指さしては「もっともっと」の手話で催促していました。母親が、「なあに？ もっとは何かな？」と問い返すと、「いちご」や「クッキー」と答えます。カップの牛乳が空っぽになると、「ミルク、もっともっと」としてから、さらに母親に向かって、片手の親指と人差し指の先をくっつけてはじく動作して、電子レンジを指さしました。レンジで「チーン！して」ミルクを温めるよう求めたのです。母親の「りょうか〜い！ まってね」に、F男の手も「まってる、まってる」と応えます。

別の日、祖父に追いかけてっこをして遊んでもらっていたとき、「ちょっと一服」と坐り込んだ祖父の前で、F男は「もっともっと」の手話を示して笑いかけ、祖父を誘うように走り出しました。傍らで見ていた母親に「おじいちゃん、F男が‘もっとやろう’って言うてるわ」と教えられて、祖父は「おお、そうか！」と驚きながら、F男との追いかけてっこを再開しました。そして、先を駆ける祖父を追いかける時には、F男の手が「まってまって」と叫んでいました。

小さな手が語り、その「ことば」を、家族は歓喜で受けとめます。3歳台を迎えるまでの愛着形成の目標は、自分を大切に思ってくれて応援してくれる存在を心の中に保ち、困難を乗り越えていくためのエネルギーをもたらす存在として利用できるようになることです。それは、母親を代表とする主たる世話者との情緒的なかわり合いを内在化することで可能となります。きこえない子どもたちにこの体験がしっかり根づいたなら、家族を拠り所として、健聴社会に出かけていくことができます。無理解という壁にぶつかり、対人関係のハードルに怯える時にも、そこに戻って安全を確かめ、心理的なエネルギーを補給すれば、また立ち上がって歩み出せます。それは、「愛着理論」で有名なJ.ボールビィが「安全基地」と呼んだものです。「だいじょうぶ」の感覚、つまり安心感をもたらす「心の絆」を、ボールビィは「^{アタッチメント}愛着」と名づけたのです。

子どもたちが好奇心をフル回転させて、外界を探索し、学習に意欲を燃やして成長するために、ろう児にも、その両親にも、手話を保障しなければなりません。日本語だけが学べるべき「正しい言語」だとみなされていた時代、多くの親子からそうした貴重な機会が奪われてしまったことを本当に残念に思います。

10. 人工内耳と手話

新生児聴覚スクリーニング検査の普及によって、きこえない子どもたちは早期に補聴器を装用できるようになりました。さらに人工内耳手術も、対象年齢を徐々に低年齢化しつつ増加してきました。実際、重度の聴覚障害をもつ子どもたちも、かつては考えられなかったほど「音の世界」を体験しながら成長できるようになりました。ただ、その結果として、音声モードのみで言語を獲得できるようになった子どもたちに対して、再び「手話は不要」という理解が広がることへの懸念を覚えています。

早期からの聴力活用が有効であっても、彼らが健聴者と同じには「きこえない」子どもたちとして成長し、きこえない人として生きていく事実には変わりはありません。人工内耳手術を受けた子どもは、軽・中等度難聴レベルのきこえを体験できるようになるのであって、健聴者になるわけではないからです。すでに述べたように、軽・中等度難聴者が、どのような心理的体験をして成長してきたかを知るとき、言語獲得の問題とは別に、きこえにくさが成長過程にもたらす影響について、注意深くありたいと思います。そうした意味をこめて、G子の事例を紹介します。

G子は、3歳の時に人工内耳の手術を受けました。ろう学校の幼稚部で学んだ後、地域の小学校にインテグレートしました。手術後の聴力レベルは上がりましたが、文脈のつかめない状況ではなかなか聞き取れません。また、発声そのものは増えましたが、発話となると、家族以外の慣れない人には伝わりにくいです。

G子やクラスメートたちの人工内耳手術を担当した医師は、人工内耳装用後は「口話だけで生活し、手話は使わないように」と指示しました。そのため、幼稚部の保護者の多くは、指導に手話を使わないことを希望しました。G子の母親も当初は同じ考えでしたが、口話だけではG子とのコミュニケーションが難しいことを自覚するにつれて、手話への関心が高まっていました。しかし、なかなか思い切ることができませんでした。そして、クラスメートのほとんどが地域の小学校に入学を決める中で、G子の両親も不安を抱きつつインテグレーションを選択したのです。

小学校に入学したG子は、当初から口話だけの指導にはついていけませんでした。一定の配慮はありましたが、教科学習もホームルームもわからないことばかりでした。G子には知的障害はありません。むしろ、周りの刺激に敏感で、好奇心旺盛です。それだけに不満が募ったはずです。G子は段々と怒りっぽくなり、級友とぶつかることが増えてきました。家では、お母さんに反抗的で、すぐにすねたり、弟をいじめたりします。

学校の勧めで、母親はG子を連れて相談室を訪れました。G子は一生懸命に伝えようと

してくれました。ところが、G子の発音はセラピストにはうまく聞き取れません。セラピストは手話ができました。でも、G子は手話も指文字も知りません。「プレイセラピーならば、ことばは要らない」と思われがちですが、決してそのようなことはありません。終了時間の説明、次回の約束、ルーム使用の規則など、プレイルームがどういう場所であるかを伝えるためには、ことばが必要です。ごっこ遊びやルール遊びでは、ことばは無くてもならない役割を果たします。何より大切なのは、子どもが遊びという表現を使って伝えてくれるメッセージをセラピストが受けとめ、子どもにきちんと応答していこうとすると、その子が自由に使えることばを保障し、共有することです。

セラピストは身振りと筆談を交えながら、G子とのプレイセラピーを開始しました。同時に、母親と話し合いました。ほどなくして、両親はG子が手話に出会える環境を探し、両親も揃って手話を学び始めました。G子の笑顔が増えて、両親がG子の成長を確認する出来事もあり、親子の関係が変わっていきます。父親は近隣の大学の手話サークルに問い合わせ、G子のために手話のできる家庭教師を探しました。一方で、G子は学校生活でも居場所を見つけ始めます。手話での会話が豊かになって、会話本来の楽しさがわかったからでしょう。G子は、健聴の子どもたちと工夫しながら口話でやりとりすることに、積極的になったのです。そして、級友たちの中には、手話や指文字を覚えてくれる子どもが出てきました。

G子の人工内耳手術を担当した医師が「手話は使わないように」と指示したことは、とても遺憾なことです。そして、そうした指示が珍しくない事実を、早期支援にかかわる活動と研究をとおして痛感してきました。医師がなぜそのような指導をするのか、その説明は、「せっかく人工内耳で聴こえるようになったのだから、手話をするのはもったいない」「手話は成長してから覚えればよいので、まずは聴覚口話で日本語を身につけなさい」「手話で通じるとわかると、子どもは声を使わなくなり、日本語獲得の邪魔になる」などです。かつて、口話主義教育の中で繰り返されたフレーズに再び出会いながら、聴覚障害児の療育は、どうしても音声言語の習得に偏って論じられる傾向があることを改めて感じています。

繰り返しますが、この時期が口話の習得にとって非常に重要である事実と共に、愛着対象とのゆるぎない関係——それは、その後の人生に大きな影響を与える「対人関係の鋳型」となります——を築く時期、そして、ことばへの感性を磨くための大切な時期であり、それらは人とのプレイフルなやりとりをとおして発達することを忘れてはなりません。習得した言語で巧く話^{うま}すことよりも、その言語で何をどんなふうに語るかが重要なのです。

新生児スクリーニング検査によって聴覚障害の早期発見が可能な時代になったからこそ、

きこえない子とその家族の支援にかかわる専門家たちは、それぞれの専門性を尊重し、互いの経験に学びながら、子どもの成長を複数の発達ラインで総合的に捉える姿勢を大切にしなければならないと思っています。

* 紹介する事例は、筆者の体験をもとに筆者が創作したもので、実在の人物ではありません。描き出したい本質的な事柄だけを取りだし、その他については個人のプライバシーを保護することに配慮しています。

参考文献

Bowlby, J.M. (1979): The Making & Breaking of Affectional Bonds, Routledge, New York.

「乳幼児の精神衛生」(黒田実郎訳) 岩崎学術出版社 1962

長谷川達也 (2009) 『目からウロコの手話』 クリエイツかもがわ書籍

井上智義 2005 「聴覚障害児におけるバイリンガル教育の意義—子どもの認知と言語の発達を中心に—」 『ベル』 No.127, 1-17、全国難聴児を持つ親の会

河崎佳子 (1999):対人関係でトラブルをくり返したろう女性の事例, 『発達』 vol.80, ミネルヴァ書房, 95-102.

河崎佳子 (1999) 「聴こえる親と聴こえない子」 『聴覚障害者の心理臨床』 村瀬嘉代子編 日本評論社, p.121-146.

河崎佳子 2003 「早期母子支援とスクリーニング」 『手話コミュニケーション研究』 No.49, 12-17

河崎佳子 (2004) 『きこえない子の心・ことば・家族』 明石書店

河崎佳子 (2005) 「新生児聴覚スクリーニングと家族支援」 『こころの臨床アラカルト』 24(4), 445-448

河崎佳子 (2008) 「きこえない子どもたちと家族」 『聴覚障害者の心理臨床②』 村瀬嘉代子, 河崎佳子編著 日本評論社, p.141-159

河崎佳子・若狭妙子 (2013) 「特別支援教育②—聴覚障害児教育と心理支援」 『臨床心理学』 増刊 5. 116-121. 金剛出版

丸山伸代 (2000) 「ろう者と聴者の間で——CODA という名のマイノリティ」 『言語』 第29巻7号 88-95 大修館書店

中尾恵弥子, 河崎佳子 (2008) 「福祉施設における聴覚障害者臨床」 『聴覚障害者の心理臨床②』 村瀬嘉代子, 河崎佳子編著 日本評論社, p.15-34.

西崎隆志 2005 聴覚障害者の自尊感情に及ぼす手話の影響 佛教大学教育学部臨床心理学科卒業論文 (未発表)

齋藤久美子 1998 「かかわり合う能力—心理力動的検討—, 『能力という謎』 (長崎勤・本郷一夫編)、ミネルヴァ書房

湯川笑子 2000a,b,2001a,b,2002 ろう者と健聴者のためのバイリンガル教育—パラレリズ

ムから学ぶこと―(1)～(5)、『手話コミュニケーション研究』No.37,38,40,42,44
若狭妙子・河崎佳子(2008)「軽・中等度難聴者の心理」『聴覚障害者の心理臨床②』村瀬
嘉代子, 河崎佳子編著 日本評論社, p.141-159